

## ヒラメの資源管理を實踐して (ヒラメ100万尾放流に向けた我々の取組み)

福島県漁協青壮年部連絡協議会

三浦孝一

### 1. 地域の概況

東北最南端に位置する福島県は、南北約154kmの入り江の少ない単調な海岸線が太平洋に面しており、比較的遠浅の豊かな漁場に恵まれている。

### 2. 漁業の概要

静穏な海域に恵まれないため、沿岸漁業は漁船漁業が殆どを占め、ヒラメ・カレイ類等の底魚資源を対象とした、固定式刺し網・底びき網漁業と、シラス・コウナゴ・オキアミ・シラウオ等を対象とした機船船びき網漁業等が基幹漁業となっている。

平成5年における本県沿岸漁業の経営体数は959経営体、漁業生産量は26千トン、生産金額は60億円であった。

### 3. 研究グループの組織と運営

福島県漁青連は、16の漁協青壮年部、会員360名で構成されており、各漁協青壮年部事業の他に、①漁青連大会の開催、②漁青連大会決議事項の陳情活動、③青壮年部活動実績発表大会の開催、④リーダー研修会(討論会)の開催、⑤いわき・相双の各支部会の研修会等の活動を行っている。

### 4. 研究・実践活動課題選定の動機

我々福島県下全域の漁業者は、第39回全国漁村青壮年婦人活動実績発表大会で発表したとおり、平成5年を資源管理元年と位置付け、その年の1月1日から、

(1) 全長30cm未満のヒラメの漁獲・販売・自家消費禁止

(2) 平成8年度から開始されるヒラメ栽培事業のため、ヒラメ水揚金額の5%拠出というヒラメ資源管理を開始した。

ここでは、我々が待望したヒラメ稚魚100万尾放流が種苗生産施設の完成する平成8年から本格開始されるため、これまで3ヵ年間の実践状況と、更に効果的な資源管理を行うための今後の取組みについて報告する。

### 5. 研究・実践活動状況及び効果

#### (1) 活動状況

平成8年のヒラメ稚魚100万尾放流を控え、我々漁青連をはじめ県内の漁業関係団体は、関係機関の指導・協力を得ながら資源管理の定着と放流効果増大のため次のような活動を行った。

ア. 産地市場の監視活動 各漁協監視委員会委員による水揚げ物の日常監視と、月1~2回の特別監視を行うと共に、県監視委員会による監視活動を行った。

イ. 違反船の処分 平成6年11月、日常監視において発見された違反船に対

し罰則（ヒラメ水揚げ金の全額没収と1日の停船）を適用した。

- ウ. 餌料板びき網対策試験 自家用餌料板びき網（エビ曳網）によるヒラメ稚魚の混獲が問題となっていたことから、代替餌料と代替漁法の開発試験を行い、代替餌料としてはクルマエビが有効であることが分かり、また代替漁法では既存漁具の改良（逃避口取り付けによる選択漁獲）で改善できる見通を得た。
- エ. 研修会等の開催 定期的に資源管理状況報告会や監視委員研修会を開催し、資源管理の実践に万全を期した。
- オ. 市場調査の実施 資源管理状況を把握するため青壮年部員が定期的に市場調査を実施した。
- カ. ヒラメの消費拡大 ヒラメ祭・朝市等を開催するなど、消費拡大のイベントを行った。
- キ. 啓蒙普及 小型ヒラメを自家消費しない台所からの資源管理を再認識させるため「資源管理まな板」を全漁業者に配布し、実践の徹底を図った。

この他にも各地区でヒラメや水産物流通に関係した学習会や視察研修等を青壮年部活動として行い、資源管理を如何にして成功させるか皆で真剣になって取り組んでいる。

## （2）効果

県内全漁業者の真剣な取組により、ヒラメの資源管理は完璧に定着し、今では規制サイズぎりぎりの紛らわしいヒラメを水揚げしないよう、自主的に規制サイズを大きくしている漁業者も現れるほどで、基準以下のヒラメは見られなくなった。一方、100万尾放流の財源として皆で貯えてきた5%の負担金も平成7年末で6千万円以上に達し、ヒラメ栽培漁業事業化の準備は着々と進んでいる。

更に嬉しいことには、平成6年と7年の2年続きでヒラメが大量発生し、昨年9月以降は、底びき網・刺し網とも30cmを超えたヒラメの大漁が続き、これも資源管理の成果と確信している。この大量発生したヒラメを、以前のように無駄獲りしないよう、上手に漁獲していくことが、今後必要と考える。

## 6. 波及効果

資源管理元年以降、

- （1）マアナゴの資源管理：選別器を各船に備えて小型魚を再放流する
- （2）イカナゴの資源管理：加工品にならないジャンボコウナゴを逃避させる漁具の開発導入・メロードの漁期・漁獲量規制
- （3）沖底の資源管理：小型で商品価値の低いマガレイ・アイナメ・ナメタガレイ等には規制サイズを設け販売禁止とする

等、地域の漁業実態に合った自主規制が、ヒラメを漁獲している刺し網漁業・底びき網漁業以外のさまざまな漁業種類にまで波及し、ヒラメと同様な実践が図られている。

また、これまで、1つの組合の中で協議される事の多かった操業上の問題や資源管理の方法についても、関係漁業者が一体となった場で論議されるようになり、みんなで決めてみんなで守る「海の上の漁業者の合併」がどんどん進んでいる。

さらに、イカナゴの様に、「コウナゴを獲る人は、メロードを獲る人の為に、価格

の安いジャンボコウナゴは獲らない」、また「メロードを獲る人は、ヒラメ・カレイを獲る人の為に、ヒラメ・カレイ等の大切な餌として必要なメロードをきちんと残す」という思想に見られるように、これまで対立関係にあった漁業者同士が、お互いの利益と共存を前提とした話し合いが持たれるようになった。

このように、ヒラメを契機とした我々漁業者の意識の変化は、「資源の管理と漁獲」に留まる事無く、「最少の漁獲で最大の所得を得るために今何をすべきか」に発展してきており、明るい沿岸漁業の将来に向けた着実な歩みを続けている。

## 7. 今後の課題

資源管理元年以降、ヒラメの漁獲規制と負担金の抛出は順調な定着を見たが、解決しなければならない課題として、

- (1) 産直等による魚価の安定向上
- (2) 理想的漁獲にいかに関近づけるかという資源管理の高度化
- (3) 大量発生資源の効率的な利用策の推進
- (4) 餌料板びき網対策の早期確立

が上げられる。

我々一人一人が「ヒラメ銀行」の預金者であり、また、「預けた元金にどれだけ利息を付けられるのか」も我々の力にかかっている。これからが本番と心を引き締めて、豊かで魅力のある沿岸漁業を目指し、更に力を結集して頑張ろうと思う。

表1 ヒラメ放流実績

年級群	サイズ	放流尾数	回収尾数	回収率
6 2	5~10cm	2 4 6 千尾	4 1 千尾	1 6. 7 %
6 3	7~10	3 3 6	9 7	2 9. 0
元	10	2 1 7	6 6	3 0. 6
2	8	3 9 2	7 6	1 9. 5
3	7	4 2 8	3 4	7. 8
4	8	4 2 8	4 4	1 0. 2
5	8	3 2 8	5 9	1 7. 9
6	8	3 8 7	未確定	
7	9	4 3 8	未確定	

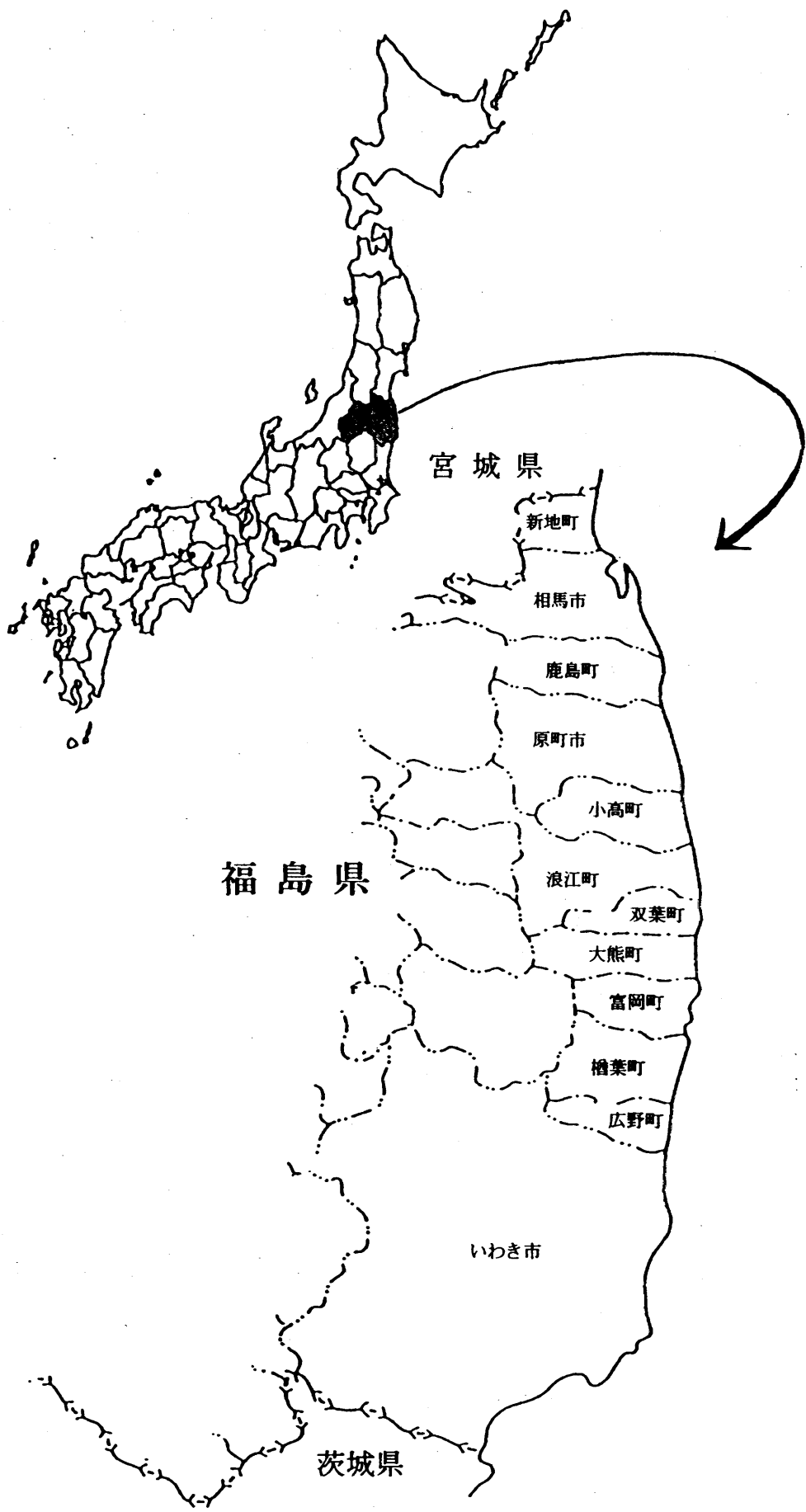


図1 福島県位置図

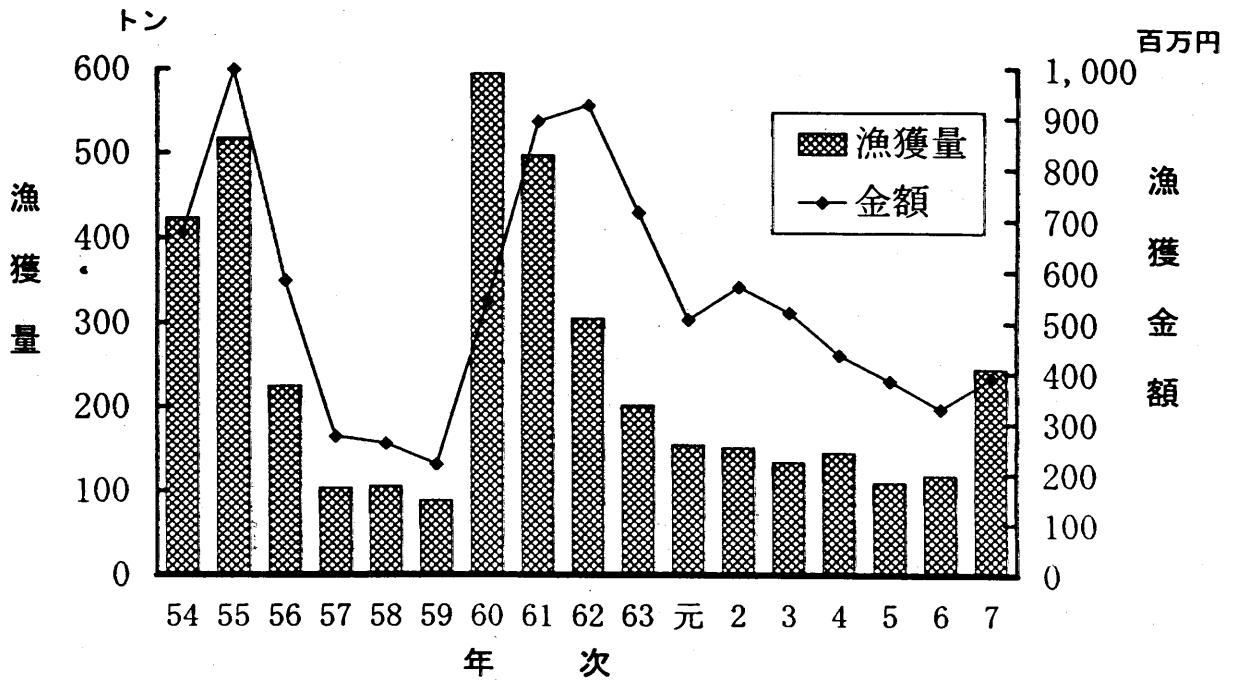


図2 福島県におけるヒラメの漁獲状況  
(平成7年分は10月まで)

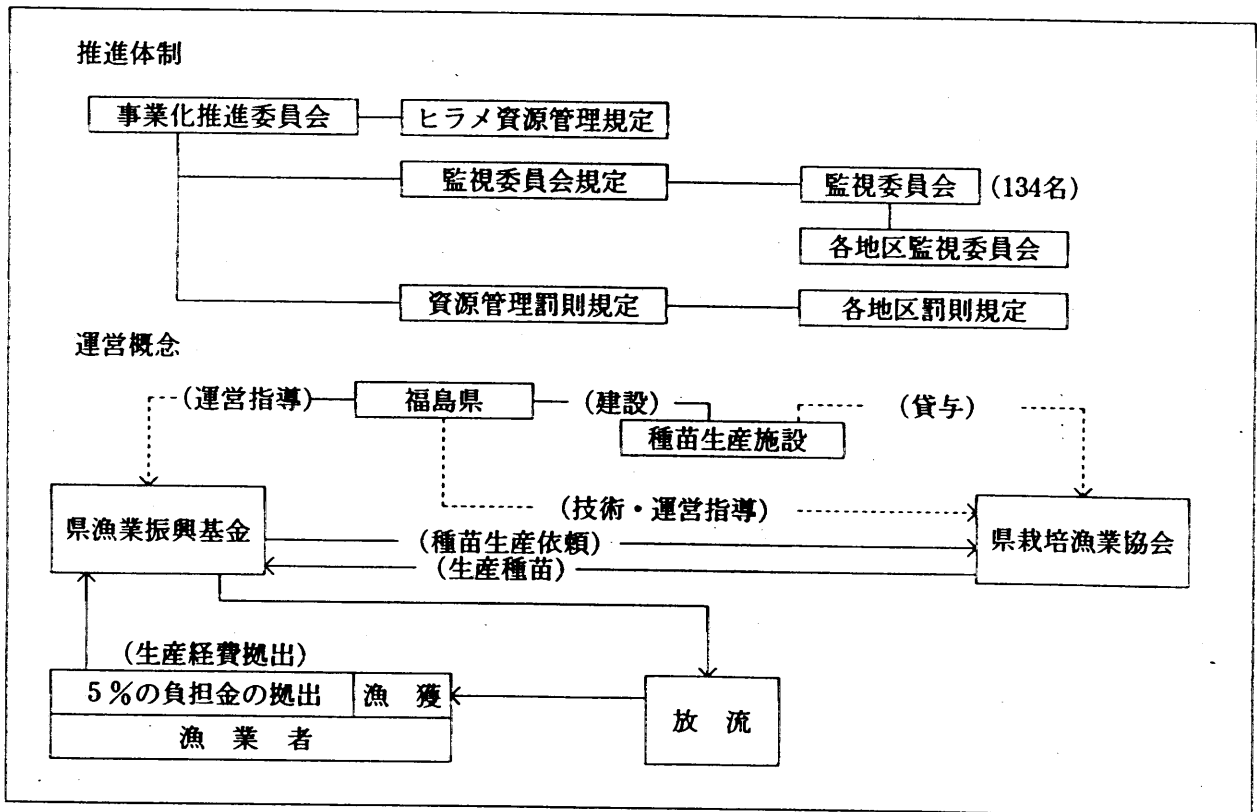


図3 ヒラメ資源管理の推進体制等

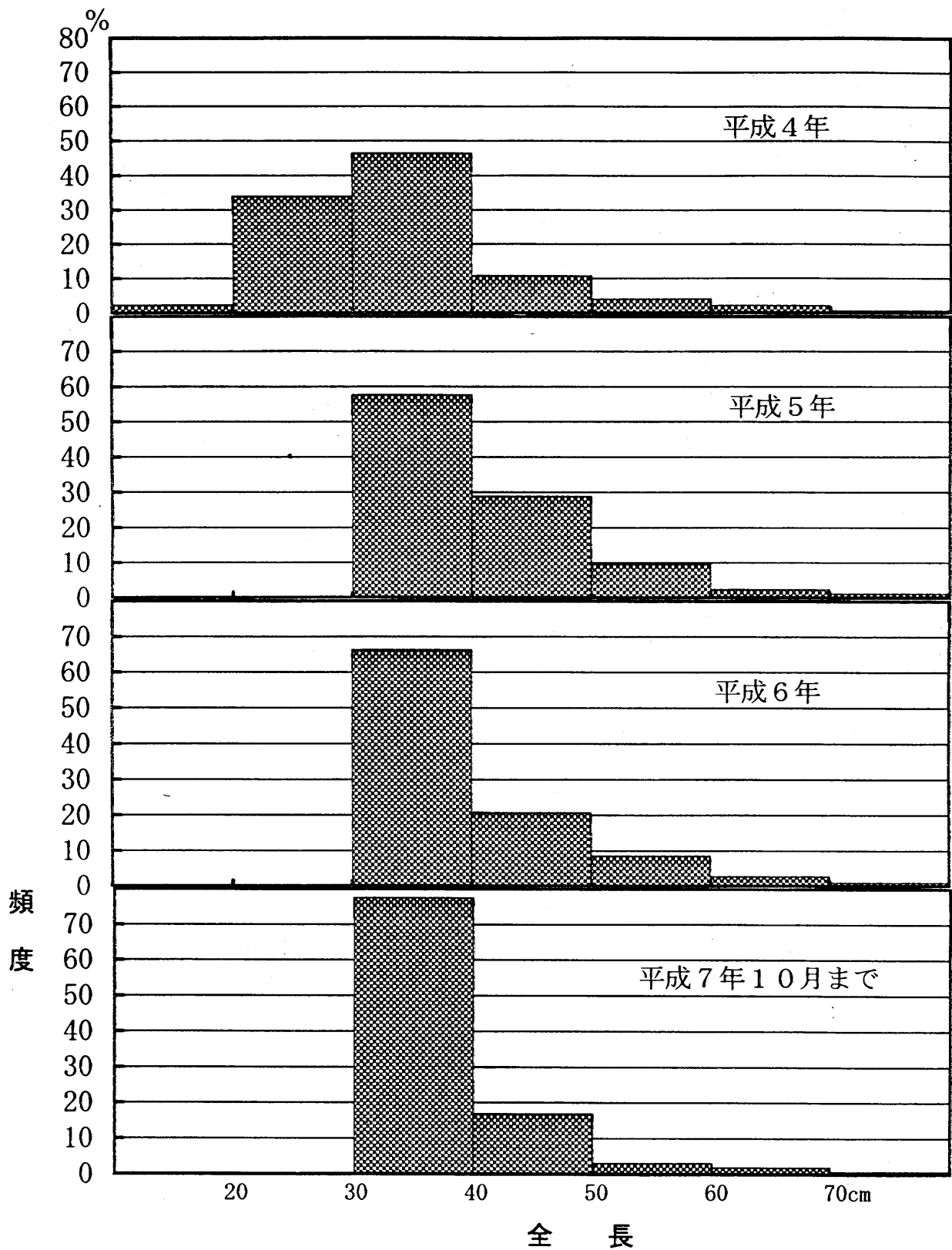


図4 福島県におけるヒラメの全長組成の推移